

一般研究 研究報告書

初年度研究報告書

研究課題

羽筭に関する基礎調査研究

日本野鳥の会会員

下坂 玉起

はじめに

バードウォッチングと茶の湯の湯の両方を趣味にしていたので、羽に惹かれて羽箒に興味を持った。しかし鳥学方面にも茶の湯方面にも羽箒についての調査や研究は見当たらない<sup>1</sup>。たまたま千家十職で羽箒担当は飛来一閑家である<sup>2</sup>と教えて頂き、お尋ねしたところ、家伝の各流羽箒の柄の木型<sup>3</sup>を拝見させて頂いた。京都で四代続く羽箒師・杉本鳳堂家にもほぼ同様の各流木型<sup>4</sup>が伝わっていることを知り(写真1)、羽箒にも流儀によりこんなに微妙な違いがあるのかと感動した<sup>5</sup>。しかし、残念ながら今やこのことはすっかり忘れ去られている。羽箒は傷みややすく傷むと捨てられがちである。せめて現存する羽箒を調査して記録に残しておきたいと思立った。

まずは時代や由緒のある羽箒をと、調査対象は近代数寄者の頃までとした。そういう羽箒だけでも二百本以上調査してきたが、遠方の流派や千家の古い羽箒の調査はなかなか進まない。まだまだ調査不足なので、あくまで現時点での中間報告とご了解頂きたい<sup>6</sup>。

### 羽箒調査報告

紙幅の都合で、本稿は実測調査の調査項目に関する報告だけに絞り、羽箒の何をどう調べたか、その概略を述べることにする。

・銘：羽箒にもわずかだが銘のあるものがある。

遠州は「截断紅塵水一溪<sup>7</sup>」「紅塵截断」と箱書している<sup>8</sup>。小堀蓬露は「蒼苔露」という銘の青鷺の羽箒を記録<sup>9</sup>している。仙台藩五代藩主伊達吉村は鶴の三ツ羽に『水口』と箱書している<sup>10</sup>。

・鳥種：箱書や記録の多くは「三ツ羽」「御羽箒」などと書かれているだけで鳥名はない。鳥名がついているものでは、鶴(鶴、玄鶴、黒鶴、丹頂、真鶴、替鶴、かさね鶴、白鶴、鶴、鴻鶴、姉羽鶴など)、野雁、大鳥(太鳥、唐大鳥)、青鷺、鷺(白鷺、青鷺)、嶋鼻(縞鼻)、鼻、孔雀、鷺、犬鷺、鷹、蜂熊、鶉(朱鷺、鶉、紅鷺、桃花鳥)、鴉、鵲、白鷺、紅鷺、紫鳥(インコ)、白雉、唐国鳥(七面鳥)、伽藍鳥、ホロホロ鳥などがあるが、正確ではない。茶人は正確な鳥名には頓着しなかったのだらうし数枚の羽だけから種を同定することは鳥の専門家にも非常に困難だと釘を刺されている。

野雁は織部も好み<sup>11</sup>、遠州が備中で打った野雁で羽箒を作ったのがきっかけで流行したと言われる<sup>12</sup>。まれにしか飛来しなくなった現在でも人気なのはその名残だろうか。嶋鼻は今のところ彦根城博物館蔵の井伊家の座箒(写真2)しかシマフクロウと同定されていない。しかし、なぜか江戸時代の博物館蔵の多くに嶋鼻を茶人が羽箒にすると書かれている。羽箒に最も多い鶴は江戸時代鷹狩りの獲物だったため禁鳥であり、拝領ルート<sup>14</sup>以外の入手方法は謎である。一転乱獲時代となった明治く戦前までは南進で海外の羽も入手しやすくなる。江戸時代はまれだった青鷺も近代数寄者旧蔵品は数多く現存する<sup>15</sup>。

・羽の部位：羽箒には、翼の風切羽(初列風切、次列風切、三列風切)(図1)、尾羽、飾り羽(蓑羽など)などが使われる。茶書や羽箒師<sup>16</sup>、茶道具業界には統一した用語がなく、混乱するので、私は原則として鳥類学用語を使用することとした。(図2)

・羽箒の寸法：「羽長」「柄長」はそれぞれに沿って計測し、「全長」は炭斗や棚に置く時のことを考え、曲がついても羽先から柄の端までの直線距離とした(図3)。

利休や織部、数内剣仲やそれ以前の羽箒の現存は不明だが、どれも伝書によると、だいたい羽五寸前後、柄三寸前後の全長八寸前後である。上田宗箇、小堀遠州の自作羽箒を拝見したが、どれも同様である。山田宗徧自作の一ツ羽(写真3)の全長は315mmで一尺余だが三ツ羽は不明。同家元所蔵の古い三ツ羽は全長八寸前後である。

石州好の野雁羽箒(写) 17 (何を元に復元されたかは不明) は248mmで八寸ほど。

井伊直弼は「石州好三羽は羽が五寸で柄が三寸とあるが、至って短く、これでは『心得ハ悪シ』と書いている<sup>18</sup>。直弼のものと判明している羽箒にはまだ出会えていないが、直弼の一番弟子の一人・大久保小膳(宗保)は直弼から多くの茶道具を頂戴しており、その羽箒<sup>19</sup>(写真4)の全長318mmの一尺余は直弼の羽箒の寸法と同程度と見てよからう。

鎮信流は、伝書<sup>20</sup>では全長八寸前後だが、御家元に伝わる羽箒には全長25cm前後の八寸ほど(写真5)と30cm前後の一尺ほど(写真6)の二種類ある<sup>21</sup>。現在の鎮信流では小さい方を風炉用、大きい方を

炉用と使い分けている。

現在の千家や藪内流の羽箒はだいたい羽八寸前後、柄三寸前後、全長一尺一寸前後で昔の羽箒より三寸ほど大きい。

偶然かもしれないが、古い羽箒と石州好、鎮信流の小さい羽箒はほぼ同寸の八寸前後、宗偏の一ツ羽と直弼好（と思われるもの）と鎮信流の大きい羽箒は一尺ほどで現在一般的な寸法に近い。

羽箒の大きさや形は当然ながら素材である羽の大きさや形に規定される<sup>22</sup>。ノガン（写真7）のメスの羽（写真8〜11）には、羽五寸用は一羽左右合計で40枚程、羽八寸用は8枚程。ナベヅル（玄鶴、黒鶴）では羽五寸用は一羽で48枚程、羽八寸用は4枚程（写真12）。トキの初列風切羽には（写真13〜14）羽八寸に使える羽は一枚もない。利休が好んだという雁はトキより小さい。いずれにしても、昔の寸法の方が他種・多数の羽を使うことができ羽箒がたくさん作れることは確かである。昔の羽箒が小さかったのは、このこととも関係しているかもしれない。

・羽のカーブと双羽：鳥にはまっすぐな羽はほとんどない。古い伝書の羽箒の図には曲がって描かれているものがいくつもある<sup>23</sup>。羽は曲がり方で左右がほぼ分かる。昔の人はその図で羽の左右を見分けていたのではないか。古い羽箒の多くがカーブしているのは、自然のままの羽で作ったものが多かったからと思われる。自然のままでもまっすぐなのは双羽（ツボ羽）だけで、それで珍重されたのではないかと考えている。

・羽の左右：茶人は、単純に羽弁の幅が広い方で羽の左右を決める。しかし、青鸞や孔雀、白鳥などの一部の羽は、時にそれと反対になる場合がある。断面が（図4・a）の時は茶人と鳥の左右は同じで大半の羽箒はこれだが、（図4・b）の時には逆になる。鳳堂氏は常に鳥の左右で考えているのでこの時には茶人と逆になる。

・もぎあげ・ぬきあげ：（図5）のように羽箒の柄と羽の間に作られた羽軸だけの部分のこと<sup>24</sup>。「利休は二分あげ、織部はあげずに柄の際から」ぴったり仕立てるとする伝書<sup>25</sup>もあれば「織部は一分あげる」とする伝書<sup>26</sup>もある。上田宗箇の羽箒は一分以上はつきりあげている（写真17、写真19）。藪内流の伝書<sup>27</sup>は「一分又キアゲ」。石州流の伝書は一分あげ、実物もあげているものが複数ある。井伊直弼の弟子・大久保宗保の羽箒（写真4）は二分あいている。遠州茶道宗家の伝書にはこの記述がなく実物もあいていないがたまにあいているものもある。杉本家にもここをあげる仕立て方はなく、鳳堂氏はこの用語自体ご存じなかった。私もずっと誤差と思って見過ごしていたので、そこまで茶人が意識的にデザインしていたことに驚いた。気になりだすと着物の襟の抜き方のように一分か二分あくだけで印象が違う。茶人たちの羽箒に対する美意識の繊細さを示す好例であろう。

・三ツ羽の重ね方と柄の断面の形：古い羽箒には「羽軸を横に二枚並べた上に一枚重ねるもの」（図6・①）と、「上下の羽の間にはさんだ中の羽を羽がふくらんでいる方にずらして重ねるもの」（図6・②）がある<sup>28</sup>。と、（図6・①a）は伝書にある利休や古法の仕立て方<sup>29</sup>で、藪内流にも「羽は…のごとく重ねる」と黒丸三つで分かりやすく描かれている伝書がある<sup>30</sup>。豊蔵坊信海箱・野雁羽箒（平瀬家旧蔵、北村美術館蔵）（写真15）はそうなっている。よく似た（図6・①b）は利休の形をそのまま踏襲しているという藪内流の現在の三角の柄の形である（写真16）<sup>31</sup>。

（図6・②）の仕立て方は藪内流<sup>32</sup>、石州流<sup>33</sup>、鎮信流<sup>34</sup>の伝書にあり、上田宗箇自作野雁羽箒（写真17）は、（図6・②）の出す方向が逆になったもののようにも見える。鎮信流には、中の羽を「はぢく」と書かれているものもあり「鎮信作『はみ當し』写」（写真18）の銘はこの仕立て方に関係しているのだろうか。こうしてみると、これらの羽箒はあえて羽を揃えようとしていなかったことが分かる。

縦に三本を真上に積み重ねて揃えるようにしたのは織部だというのがほとんどだが、遠州説もある<sup>35</sup>。これには、羽軸をそのまま柄にしたもの（図6・③a）と、羽軸を切って竹を削った柄に挿しているもの（図6・③b）がある。

ノガンの尾羽の羽柄は短く（写真11）、そのままでは羽箒の柄が短くなってバランスが悪く使いにくい。柄を長くするためにも継ぎ足す必要があったろう。鳳堂氏は曲がっている羽は羽軸を短く切って柄に挿すと切らないよりずっと羽を揃えやすいという。これは相当画期的な改良策だったように思う。美しく使いやすい羽箒にするための創意工夫であろう。茶杓など竹を削り慣れていた茶人ならではの発想

だったのだろうか。利休の茶杓の下削りをしたとされる千紹二の羽箒について『宗湛日記』には「モトノユイヤウ有」（元の結び様有）と注記している。

上田宗簡が自作した左右と真の三本組の羽箒<sup>36</sup>（写真19）は柄に挿して羽三丈がびったりきれいに揃い、先述した野雁の三ツ羽（写真17）とは全然違う。作った時代が違うのだろうか。

遠州作「替鶴」（根津美術館蔵）（写真20）は柄に挿す仕立て方（図6・③b）で羽が三枚びったり揃って美しい。遠州箱「太鳥羽箒」（野村美術館蔵）（写真21）や小堀蓬雪箱「鶴本白 一對」（野村美術館蔵）（写真22）は、触った感触で柄に芯を入れず羽軸をそのまま使っていると分かった。このようにびったり揃うには、同種・同大の鳥の同位置の羽を一枚ずつ三羽分使っている可能性がある。それが一番同じ形になるからだ<sup>37</sup>。このことは、偶然分解できた小堀宗明箱「たむてふ羽箒」（写真23）が証明した。三枚ともタンチョウの「右次列風切羽一番」（図1）の同じ位置の羽だと専門家<sup>38</sup>によつて同定されたのである。遠州流の羽箒がなぜきれいにびったり重なり、いかに贅沢かが分かる。

・柄の端の形：羽箒の柄の端の形は茶杓の切留の違いに似ている。（図7・①）のように横から見ると「垂直」の形は、古い羽箒や武家流に多い。（図7・②）の「斜め」の形は現在の千家の形だが、この形について書かれた伝書やこの形の江戸中期以前の羽箒はまだ見ていない。いっどうしてこうなったか謎である。飛来家と杉本家の木型に多少違いはあるが、両家とも角度が小さいのは表千家、わずかに大きいのが裏千家である。

・柄を巻く素材：ふつうは竹の皮を使う。鳳堂氏は、昔は班が全くなく真白でしなやかな竹皮<sup>39</sup>を使っていたという。たしかに古い羽箒には無班できれいな竹皮が多い。一見竹皮と思えず、トウモロコシの皮のようでもある<sup>40</sup>。献茶用羽箒には白の塩瀬を巻く。他に、大和錦や金襴を巻いたものもある<sup>41</sup>。

・竹皮の巻き方：柄の下端の方から見て時計回りの巻き方を右巻き、その逆が左巻きである（図8）。伝書によると織部や宗和は「文など巻く」とし<sup>42</sup>と常に右巻き、藪内流<sup>43</sup>や石州流<sup>44</sup>、鎮信流<sup>45</sup>は「着物の襟のように」と常に左巻き、と羽の左右に関係なく常に同一方向に巻くものもあり、実際そうなっているものがある<sup>46</sup>。しかし、他の伝書や飛来家も杉本家も、羽箒を自作していらした小堀宗明・宗慶宗匠も小堀宗通宗匠も、右羽は右巻き、左羽は左巻きで、そう聞いていたので私もそれがルールと思っていた。それが最も多いが決まりとは言えない。左右が茶人と鳥で逆の場合はさらに複雑になる<sup>47</sup>。

・竹皮の巻き止めの位置：伝書でも実物でも竹皮の巻き止めの位置は、柄の左右の側面の中央か（図9・a）、柄の下端（図9・c）がほとんどである。しかしあえて側面の上か下三分の一にして中央は避けよ（図9・b）という伝書もある<sup>48</sup>。当初、誤差や竹皮が乾いて縮んだためと見過ごしていたが、見直すと微妙なものも多く、意図的か偶然か判断は難しい。

巻き止めも柄の際も竹皮の端は内側に折り返すと書かれている伝書もあり、実際にそうになっているものもあるが、切ったままにしているものが一番多く、鳳堂氏もそうしている。

・竹皮の端の始末：柄の断面が三角や丸になる羽箒はほとんど（図10・①）のように捻ってから左右か下に折り返している。有楽流<sup>49</sup>、石州流、鎮信流の伝書ではこのように捻ってから横に折り返すとしており実物にもそうになっているものがある。遠州の弟子と言われる豊蔵坊信海箱の羽箒（写真15）もこうしている。丸い物を巻いた端はキャンディーのように捻るのが一番しっかり閉じることができる。それでこうしたのではないか。

藪内流ではさらに強く掬って一回転させ瘤を作ってから下に折り返す。（写真24）。飛来家の遠州流の木型の一つもそうになっている。遠州茶道宗家にはない仕立てなので、それ以外の遠州流にこのような仕立て方があったのだろうか<sup>50</sup>。

柄が（図10・②）のように垂直の場合は、左右か下に折るものが多い。しかし、金森宗和作玄鶴羽箒<sup>51</sup>は、柄の端は垂直だが竹皮を折らずに捻っている。それを左右線対象にしたような羽箒が田中仙樵所持の玄鶴羽箒（写真25）で、どちらもナベツルの羽と思われる。石州流にも同様の仕立て方の伝書の記述とその実物がある。

左右に折り返す時、幅を細くして折り返すきれいな仕立ては遠州流に多い。先端の切り方には横一文字のものと先をとがらせるものがあり（図10・②）、それぞれ伝書では「一文字」「剣先」と優雅な名前をつけている。

ほとんどの遠州流羽箒は竹皮を柄にきつちり沿わせて折り返しているが、杉本家に伝わる遠州流の仕立て方は柄の先で小さな穴をあけてから折り返す(写真26)。同様の仕立てを三本実見しているので遠州茶道宗家以外の遠州流の仕立て方だろうか。

杉本家の石州流の仕立て方は(図10・③)のように竹皮の端を柄の幅に細く切って下に折り返す。これとほぼ同じ仕立て方は土佐山内家や井伊家伝来羽箒の中に多数見ている。井伊直弼の先代・直亮の書付のある「青鷲三ツ羽」(写真27)もほぼ<sup>52</sup>これと同じである。

鳳堂氏は、先述した表千家仕立てでは捻じった竹皮の端を直角に切り、裏千家仕立ての場合は斜めに<sup>53</sup>切ると先代から伝わっている(図10・④)。実際両方の切り方が存在するが、どこまで定番なのかはわからない。

・**紐の素材**：紐には竹皮を燃ったもの、紙を燃ったもの(紙繕り、元結、水引)、麻(苧)紐、絹紐などがあるが、伝書<sup>54</sup>では、利休は竹皮を燃った紐を使い、宗旦は紙繕りを使ったとしている。石州流の古い伝書にも紙繕りを使う仕立て方がある。古い羽箒や上田宗箇、遠州流はほぼ全て、石州流、鎮信流(「鎮信作」はみ當し)写)は細い紙繕りだが)の多くは竹皮を燃った紐を使い、千家系と藪内流、石州流の一部、井伊直弼の弟子・大久保宗保は紙繕りを使っている。私は以前、茶道史に符合させて、武家系は利休の竹皮紐を踏襲し、宗旦後の千家系は宗旦の紙繕りを踏襲していると考えたが、武家流でも石州流系には紙繕りの羽箒が続々出てきたので、そう単純ではないと分かった。献茶用羽箒には紫の絹紐を用いる。

・**結ぶ本数と位置**：伝書には、紐で結ぶ位置について、紐上、紐下それぞれの寸法が図示されている(図11)。大半は二か所だが、三か所結ぶものもある。古いものは結ぶ位置が両端に離れているものが多く、現在のものとは少し印象が違う。

・**結び目の位置**：結び目の位置は上下左右色々ある(図12)が、横か下の竹皮の巻き止めの上で結ぶものが多い。石州流や鎮信流の伝書には、羽側は上、端側は横で結ぶと書かれており、そういう羽箒を何本も見ている。有楽流の伝書には両方とも上で結ぶと書かれており、それも三本実見している。

・**掛け緒の有無**：掛け緒には、下の結び紐をのぼして輪にするもの(図13・a)と別の輪を差し挟むもの(図13・b)があり、どちらも紙繕りが一般的である。前者は藪内流、石州流、鎮信流の伝書にあり、後者は千家流の伝書、それに山田宗偏は両方書いている<sup>55</sup>。鎮信流の伝書は竹皮を燃った紐で結び目を延ばして掛け緒にするとあり、実物にも竹皮を燃ったものがある<sup>56</sup>。

・**柄の削り方**：戦前まで羽箒を自作されていた小堀宗慶宗匠は、柄の中の竹の芯を割らずに錐のように細い小刀で隙間を削ってフォーク状にしていた。

杉本家では柄を三本に割り、一本ずつ先をとがらせ(図14)羽を挿してから元通りにびったり合わせる。実際、羽軸の根元や竹皮の虫食い穴から中が見られたものはいくつ割ってある。当初は宗慶宗匠のようにそのまま削っていたものを、誰かが割って削る方法を思いつき、その方が格段に楽で効率が高いので職人に伝わった秘伝だったのかもしれない。

・**一ツ羽**：山田宗偏は琵琶を五十七面も作るほど木工の才があり、宗偏自作の桑柄一ツ羽(写真3)の柄も丸みを帯びた握りやすそうな形である。肉眼では見えないほど極小の穴をあげ極細の針金を巻き通す技に驚かされる<sup>57</sup>。五世家元が宗偏作の柄を写したツボ羽の一ツ羽(写真28)を作っていることからも宗偏流では一ツ羽を重視していることが分かる。

石州流の一ツ羽は竹皮を柄の先で結んでから切り放すのが石州の好と伝書にあり、実施にその独特の仕立て方の羽箒を井伊家の羽箒に二本実見した。(写真29、30)顕微鏡で見るとトウモロコシの皮にも似て見える<sup>58</sup>。伊達家には三ツ羽で竹皮だが同じ仕立てのものがある。(写真31、32)

武家流には三ツ羽とは別の用途の一ツ羽があり、流派によって寸法も形態も違う。使い方も様々で、灰型との関係を含めまだまだまったく未開明である。

・**座掃(座箒、掃込、大掃込大羽)**：彦根城博物館の井伊家伝来の羽箒二十七本(うち一本は茶箱用)のうち十一本が座箒である。石州流は座箒をよく使うとのこと、井伊直弼も迎付の時、亭主は座掃を携えたと書いている<sup>59</sup>。

調べているうちに、クジヤクの目玉模様やキンケイらしき赤い飾り羽がほとんど同じ座箒（大羽）が伊達家（仙台市博物館蔵）（写真33）、井伊家（彦根城博物館蔵）（写真34）、鎮信流家元（写真35）にあることを発見した。こんなに派手で珍しい飾り羽がここまで似ているのは偶然の一致とは思えない。博物館のものは両方とも由緒不明だが、鎮信流家元の箱書には、茶堂の松浦（豊田）伯翁からの献上品で、天保十二年の鎮信公の命日に茶堂の久家竹哉が持って来たとある。別の座掃と二本一緒に入っていた様子から、その箱に対応するものか確信は持てないが、いずれにせよ三家とも石州流なので石州流のお好みの可能性はある。他の石州流にもないか調べており、特異な形状と共に謎解きが楽しみである。

## おわりに

なにしろこれまでまったく調査されて来なかったことなので、羽箒のどこをどう調べたらいいのか分からない。実物を調査する度に、また伝書に記載を見つけた度に、驚き、発見し、それ以前の見落としや間違いに気づいて冷や汗をかいた。その都度調査項目が増え、何度も調査表を作り直した結果がこの調査項目である。まだしばらくこんなことを繰り返そうなので、今はまとめるのを諦め、項目別に報告するだけにした。昔の茶人たちは羽箒のこんな細部にまで関心を払っていたことが伝われば現時点では十分と思っている。

チェックが細部にわたるようになるにつれ、調査時間がどんどん長くなり、本当に多くの方々にご迷惑をお掛けした。たくさんの方々の鳥関係者にもご協力頂いている。一々お名前を記せないのは心苦しいが、どうかここまでできたのも皆様のお陰と心より感謝している。それまで羽箒のことなど気にも留めなかったという方々が、羽箒が気になりだしたとおっしゃることは何より嬉しく、それだけでも調査した甲斐があったと思っている。

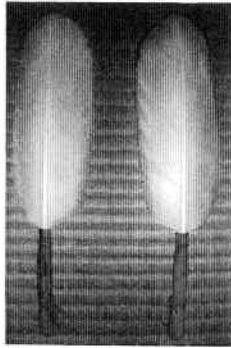
今後も、羽箒とその鳥たちのために、地道に羽箒調査を続けていきたいと思っている。

- 1 堀口捨己氏は『利休の茶』の中で文献資料を少し検討されている。
- 2 「五代一閑の代より羽箒も取り扱う家となる」『千家十職 茶の湯の木工と塗り物細工 一閑張細工師・飛来家と指物師・駒澤家』特別展パンフレット 表千家北山会館 2005年
- 3 千家以外に、久田流、藪内流、遠州流、宗和流、不昧好がある。その一つには「明治三年四月」と読める墨書がある。
- 4 三千家に、藪内流、遠州流、石州流、相州流がある。
- 5 最初にご両家の木型を拝見し、流派の基本的な違いが分かったお陰で、調査が大変やりやすくなった。御両家のご協力がなければとてもここまでできなかったと心より感謝している。特に鳳堂氏には復元作業など非常に多くの具体的な情報とアドバイスを頂いている。
- 6 「調査報告 羽箒と茶人―形態から見る羽箒への思い入れ―」野村美術館 研究紀要2009 第18号の拙文もご参照頂ければと思う。
- 7 小堀家旧蔵・藤田美術館蔵
- 8 「截断紅塵水一溪」の典故は『普燈録』で禅の真諦が俗塵を払う意とのこと（『茶道聚錦』12 茶の道具3 小学館 昭和60年）。「截断紅塵」は春屋宗園が羽箒の返礼の書状に羽箒の褒め言葉として使っている。（桑雲老宛羽箒返礼 『茶の湯の掛物』茶道資料館 平成四年）
- 9 遠州茶道宗家蔵
- 10 現在は井伊家から彦根城博物館に伝わっている。
- 11 『古織公聞書』『古田織部茶書』『織部茶湯聞書』
- 12 『長暗堂記』「ひととせ、野雁と云鳥の羽箒世にはやりし、その初めハ、遠江殿備中下国の時、野雁を打給ひて、其羽箒につかい給ひしより起れり」
- 13 『堀田禽譜』『観文禽譜』『本草綱目啓蒙』『禽譜』など
- 14 伝書には拝領の羽箒の扱いが数多く載っている。豊橋南坊流御家元には「將軍が自ら鷹狩りで捕らえた鶴の羽を拝領したので羽箒にして進上する」という書状が伝わる。

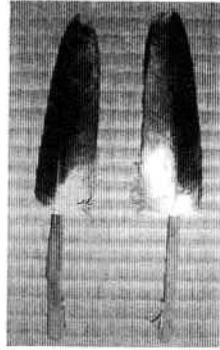
- 15 現在流布している「青鷲を第一とする」というあたかも昔からの定説のような「言い習わし」はこの頃言われ始めたという仮説を立てており、裏付けを追っている。
- 16 京都の羽箒師・杉本鳳堂氏と名古屋の羽業者でも呼称が違う。
- 17 野村瑞典氏が石州流の一流派のお家元に恵贈したものの「石州好野雁羽箒 一双」と箱書あり
- 18 『茶道下留』史料井伊直弼の茶の湯(上)彦根城博物館叢書2
- 19 大久保小膳の子孫の『埋木舎』当主大久保家所蔵
- 20 『法合之書』『松翁漫録』
- 21 「室町時代写」と明治の中興の祖・心月公「御作写」が25cm前後、「鎮信作『はみ當し』写」と心月公「御使用写」が30cm前後
- 22 ノガン(写真7)は実はツル目だがオスでも全長100cmとツルにしては小さい。メスは全長75cmで羽も小さめと思われる。実測できたのはメスだけだが(写真8〜11)、それでも羽五寸用の羽は一羽の左右合計で40枚ほどある。しかし羽八寸用は一羽に8枚程しかない。
- ナベヅル(玄鶴、黒鶴)も全長96.5cmで、ほぼノガンのオスと同大のようだ。羽八寸用の羽は一羽につき4枚しかないが、羽五寸用なら一羽で48枚もある(写真12)。
- トキも全長76.5cmと小さく、ほぼノガンのメスと同大で、実測できたのは初列風切羽だけだが(写真13〜14)、この中には八寸に使える羽は一枚もない。次列・三列・尾羽は初列より小さいことが多いので、トキで現在の大ききの羽箒を作ることほとんど不可能かもしれない。
- 23 『草木木』『南方録』『古織茶湯書』など
- 24 「もぎあけ」の「もぎ」を熊倉功夫氏は「自信はないが」としながら、和船のへさきに突き出した角材の部分の「もぎ」に見立てて類推されている。『茶道長間織答抄』を読む(一)『和風』第86号
- 上田流和風堂 平成16年9月1日) 私は鳳堂氏が刃物を使わず指でサツと羽弁を「もぎ取る」作業を見て「もぐ」が変化した語ではとひらめいた。羽弁は意外に簡単に剥ぎ取れる。実際古い羽箒のその部分も書いている。それで私は「もぐ」と解釈した。『茶譜』『松翁漫筆』『羽箒相傳』『石州流茶抄』などにこの記述があり、『茶道長間織答抄』『宗甫公古織へ御尋書』は「モキアケ」、『茶具寸法圖解』巻上『石州流茶抄』(下)は「ヌキアゲ」と称し、『茶湯最初之次第』『茶譜』『松翁漫筆』『羽箒相傳』『石州流茶抄』(下)には図解がある。
- 25 『茶道長間織答抄』『宗甫公古織へ御尋書』
- 26 『茶譜』『羽ノ元一分ホト茎ヲ見セテ卷ヘシ』
- 27 『茶具寸法圖解』巻上 宝暦六年1756写 藪内竹心輯 龍谷大学図書館蔵
- 28 二本の羽を握ると自ずとこの形になるので、これが一番原初的な形と思われる。
- 29 『貞要集』『三ツ羽宗易は二ツ下にして、羽一ツ上に重ね』  
『柳本織田家記録』『古法ハ羽のくきを左右二ならへ、その上に一まい重祢用る也』秋永政孝編1974  
大和郡山図書館蔵
- 30 『利休流茶道藪内家傳』坤 文政元年1818 佐賀県立図書館蔵
- 31 当初は羽軸をそのまま束ねていたのがやがて形はそのままに竹の芯に挿すようにしたのであるか。
- 32 『茶具寸法圖解』巻上 宝暦六年1756写 藪内竹心輯 龍谷大学図書館蔵
- 33 『石州流茶抄』(下)、「三羽の中の羽をはさみ出し上下を重ね中はふくらの方に出す」
- 34 『法合之書』「中の羽をふくらの方へ出し上の羽と並べ上下重ねて結う。」
- 35 藪内流の『利休流茶道藪内家傳』坤 では「遠州已来の事」と書かれ、藪内流にはそう伝わる。
- 36 「宗ヶ様御作 三羽箱 五重」上田流和風堂所蔵、箱書は五段重の意味と思われるが、この一段のみ現存。羽箒の重箱はこれ以外未見。
- 37 鳳堂氏も昔は一度に十羽くらいまとめて「なぶつて」いたのでそうしていたという
- 38 タンチョウ保護研究グループ理事長 百瀬邦和氏
- 39 鳳堂氏は「カブジロ」と呼ぶ。もう入手不能なので、現在は中国産の班が多く固い竹皮で苦労されている。植物学の専門家も注目するが、どういいう竹皮か不明。

- 40 トウモロコシも使うと聞いたが、もしもトウモロコシであれば江戸時代には珍しかっただろう。
- 41 三井高棟は明治天皇への献茶用鶴羽箒に大和錦を巻き(『三井家のおひなさま』2007出品)、貢印大皆具の真鶴羽箒に金欄を巻いている。(『三井文庫銘品展』図録 日本経済新聞社 2002)
- 42 『茶譜』
- 43 『茶具寸法圖解』巻上 宝暦六年1756写 藪内竹心輯 龍谷大学図書館蔵
- 44 『石州流茶抄』(下)
- 45 『法合之書』
- 46 大久保宗保の羽箒はふつうの右羽だが左巻きである。これは常に左巻きという石州流の伝書通りにしたのだろうか。
- 47 井伊直弼の先代・直亮の書付のある「青鸞三ツ羽」(写真27)の竹皮の巻き方は左巻きである。これは常に左巻きという石州流の伝書通りかもしれないが、青鸞のこの位置の羽(次列風切)は茶人には左羽なのでそれで左巻きにした可能性もある。しかし鳥には右羽なので、鳥に合わせる鳳堂氏なら右巻きにするところである。
- 48 『茶具寸法圖解』巻上 「三つ割一つ上にてても(下にてても)合わせ目とる。中にては悪しし」宝暦六年1756写 藪内竹心輯 龍谷大学図書館蔵
- 49 『柳本織田家記録』秋永政孝編 1974年 大和郡山市立図書館蔵
- 50 鳳堂氏によればこの瘡を作るのは難しいそうで、いつなぜ誰がわざわざこんな独特の意匠にしたのか興味深い。
- 51 金森宗和作 玄鶴三羽 醍醐中将進上 藤田美術館蔵
- 52 どちらとも紙縫りで結んでいるが鳳堂氏は竹皮を擦った紐で結ぶ。
- 53 鳳堂氏いわく「はずかい」に
- 54 『茶道要録』山田宗徧 元禄四年1691年
- 55 「その緒を伸て輪にしてかくるようにもまた別に輪をしてその折返の間にへも入る」『茶道要録』山田宗徧 元禄四年1691年
- 56 紙縫りを使う藪内流より輪が短い。竹皮で長い紐を擦るのは難しいからではと鳳堂氏はいう。
- 57 千家では一ツ羽は酷暑用だが、宗徧は炉は三ツ羽、風炉は一ツ羽としている。師の宗且も折々一ツ羽を使っていた(『茶譜』)のでそれを引き継いだのだろうか。
- 58 註39のようにトウモロコシも使うとおっしゃる方がいるが、まだ実証できていない。
- 59 「亭主迎ひ二出ること、座掃を携へ」『茶湯一會集』茶道古典全集 第十卷 客が最初に目にする道具なので重用したのだろうか。

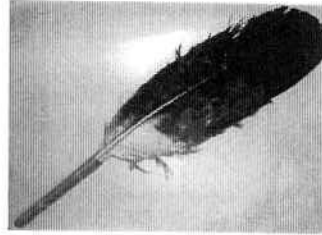




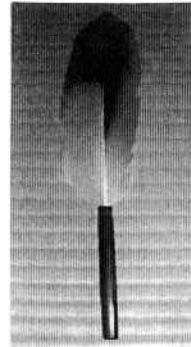
6. 鶴三ツ羽 心月公御使用写 如月箱 鎌倉流家元藏



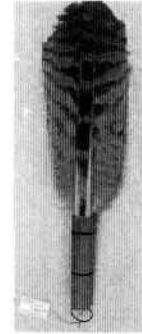
5. 室町時代写 上作品 鎌倉流家元藏



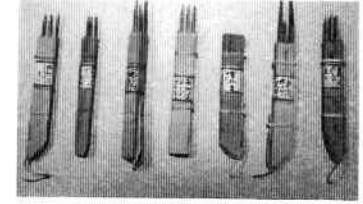
4. ミツ羽 大久保宗保旧藏 『埋木会』当主大久保家藏



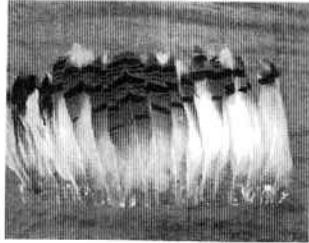
3. 山田宗製作 養術一ツ羽 山田宗鑑流家元藏



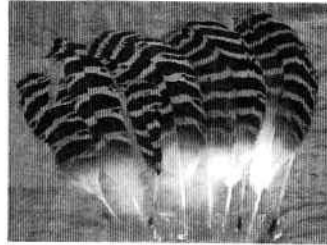
2. 鳩島座箭 井伊家伝来 彦根城博物館藏



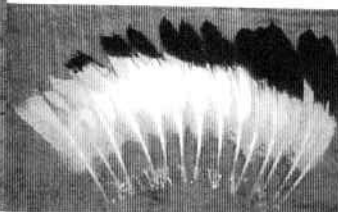
1. 杉本真室家伝来・各流羽箭の柄の木型



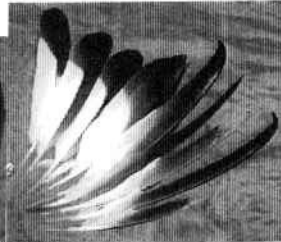
11. ノガン♀尾羽 横浜市野毛山動物園藏



10. ノガン♀左三列風切 横浜市野毛山動物園蔵



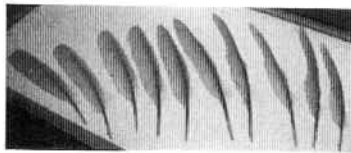
9. ノガン♀左次列風切 横浜市野毛山動物園蔵



8. ノガン♀左初列風切 横浜市野毛山動物園蔵



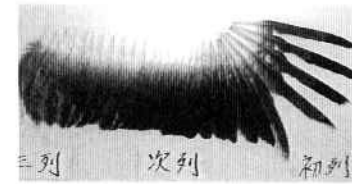
7. ノガン♂羽製 仙台市八木山動物公園



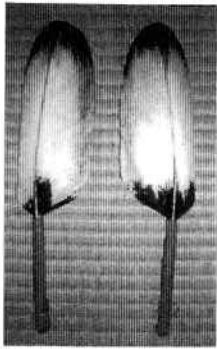
14. トキ左初列風切 佐渡市トキ資料展示館蔵



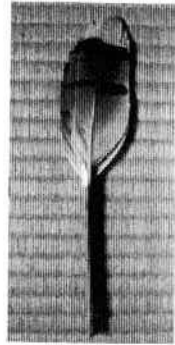
13. トキ右初列風切 佐渡市トキ資料展示館蔵



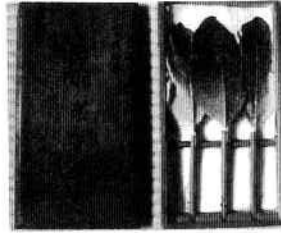
12. ナベヅル 右翼 岡南市鶴いこいの里交流センター蔵



18. 鷺三ツ羽 鎌倉作 はみ堂し写 心月齋 鎌倉史変元蔵



19. 宗ヶ櫻齋作 三ツ羽 上田流和風堂蔵



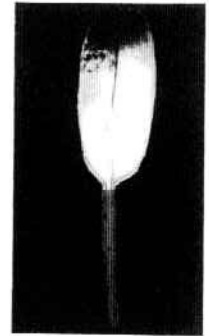
17. 上田宗ヶ櫻齋工 三ツ羽 上田流和風堂蔵



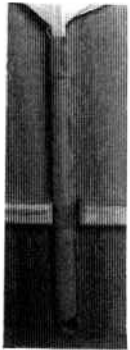
24. 藪内流の柄 耕三寺博物館蔵



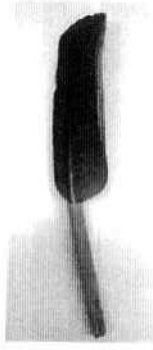
16. 藪内流の柄 耕三寺博物館蔵



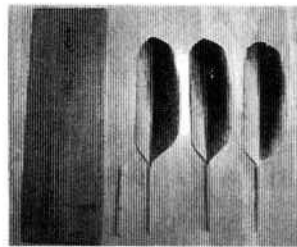
15. 野鹿三羽袴 豊蔵坊益海齋 北村美術館蔵



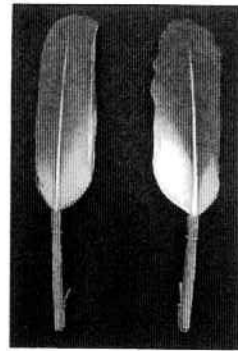
26. 杉本眞聖家の達州仕立て



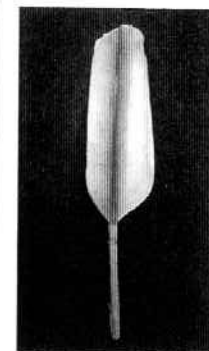
25. 玄鶴三ツ羽 田中仙橋齋 三原庵・大日本茶道学会蔵



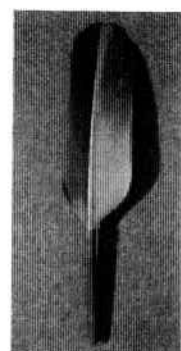
23. たむてふ羽袴 タンチョウの右次列風切一番二枚



22. 緋水白 一対 小塚達雪齋 野村美術館



21. 達州箱 太島 野村美術館



20. 達州作 碧鶴 秋津美術館蔵

孔雀金鷄飾り羽付腰蓑



35. 鎌倉流光蔵



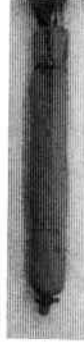
34. 井伊家旧蔵 彦根城博物館蔵



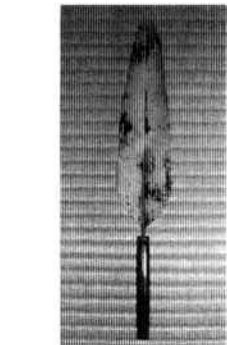
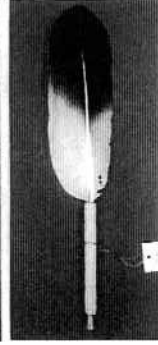
33. 伊達家旧蔵 仙台市博物館蔵



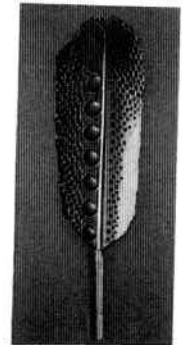
31. 32. 三ツ羽 伊達家旧蔵 仙台市博物館蔵



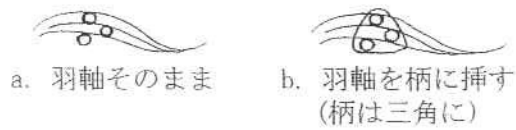
29. 30. 一ツ羽 井伊家伝来 彦根城博物館蔵



28. 山田宗輔作写 ツボ羽 山田宗輔流家元蔵



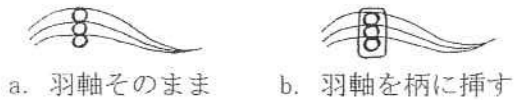
27. 青鶴 三ツ羽 井伊家伝来 彦根城博物館蔵



① 2枚を横に並べた上に1枚を乗せる

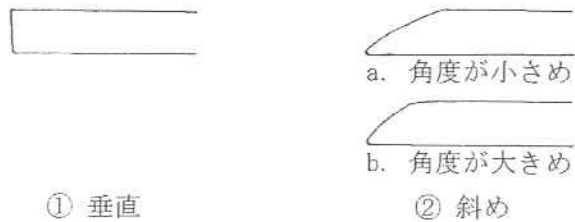


② 上下の羽で中の羽をはさみ  
中の羽は「フクラノカタ」へ出す



③ 3枚を縦にまっすぐ重ねる

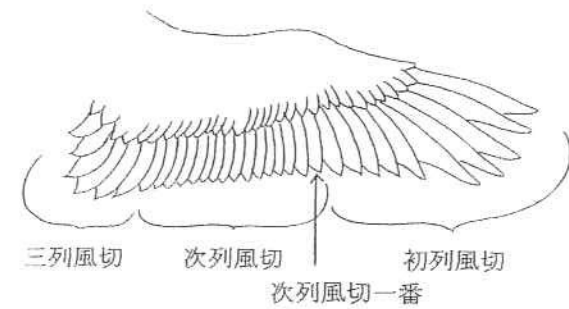
(図6)



(図7) 柄の端を横から見た形

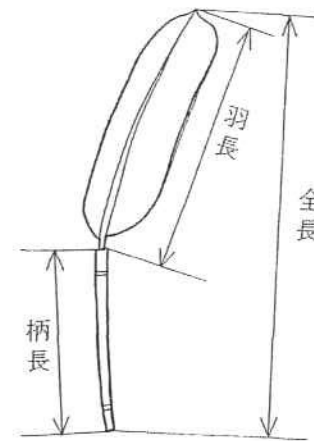


(図8) 竹皮の巻き方 (柄の下端から見て)

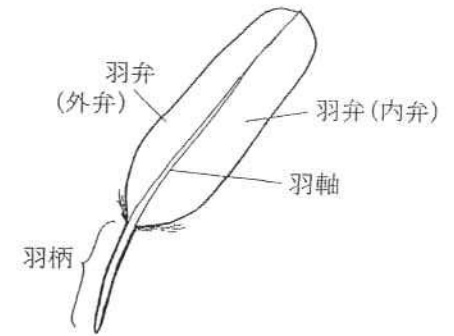


(図1) 翼の羽の名称 (右翼上面)

(『タンチョウーそのすべて』 正富宏之 (北海道新聞社) の図を元に筆者描き直し)



(図3)



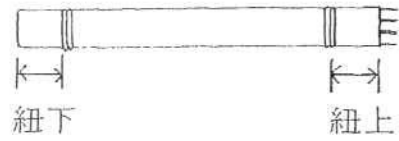
(図2) 羽の部分 (右羽)



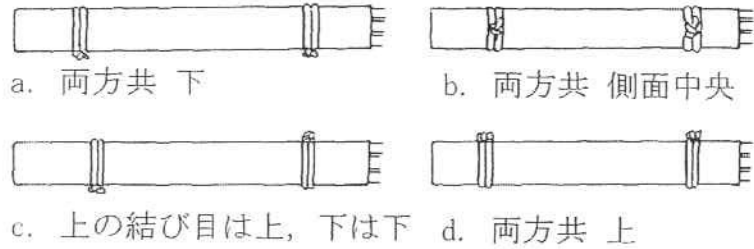
(図5)



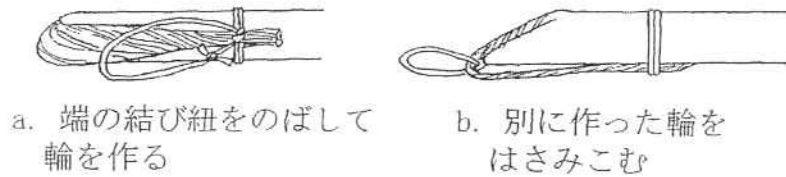
(図4) 羽箒断面模式図



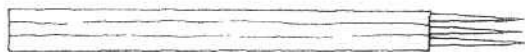
(図11) 紐の位置



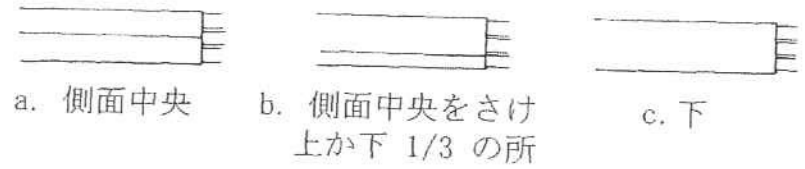
(図12) 結び目の位置



(図13) 掛け緒のつけ方



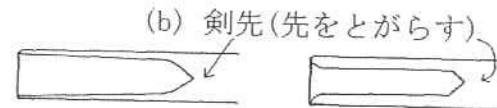
(図14) 柄の中の竹芯



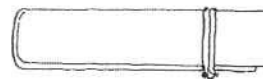
(図9) 巻き止めの位置



- ① ねじる  
a. 下端がとがらない



- ② 左か右に折り返す



- ③



直角



斜め(はすかい)

- ④ 下端がとがっている

(図10) 竹皮の下端の始末

「羽箒に関する基礎調査研究」添付写真リスト 下坂玉起

1. 杉本鳳堂家伝来・各流派の羽箒の柄の木型
2. 嶋鼻座箒 井伊家旧蔵 彦根城博物館蔵
3. 桑柄一ツ羽 山田宗徧作 山田宗徧流家元蔵
4. 三ツ羽 大久保宗保旧蔵 『埋木舎』当主大久保家蔵
5. 室町時代写 上作品 鎮信流家元蔵
6. 鶴三ツ羽 心月公御使用写 如月箱 鎮信流家元蔵
7. ノガン剥製 仙台市八木山動物公園蔵
8. ノガン♀左初列風切 横浜市野毛山動物園蔵
9. ノガン♀左次列風切 横浜市野毛山動物園蔵
10. ノガン♀左三列風切 横浜市野毛山動物園蔵
11. ノガン♀尾羽 横浜市野毛山動物園蔵
12. ナベヅル 右翼 周南市鶴いこいの里交流センター蔵
13. トキ 左初列風切 佐渡市トキ資料展示館蔵
14. トキ 右初列風切 佐渡市トキ資料展示館蔵
15. 野雁 豊蔵坊信海箱 北村美術館蔵
16. 藪内流の柄 耕三寺博物館蔵
17. 上田宗ヶ様御細工 三ツ羽 上田流和風堂蔵
18. 鷺三ツ羽 鎮信作 はみ當し 写 心月箱 鎮信流家元蔵
19. 宗ヶ様御作 三ツ羽 上田流和風堂
20. 遠州作 替鶴 根津美術館蔵
21. 太鳥 遠州箱 野村美術館蔵
22. 鶴本白 一对 小堀篷雪箱 野村美術館蔵
23. たむてふ羽箒 タンチョウ右次列風切一番の羽三枚
24. 藪内流の柄 耕三寺博物館蔵
25. 玄鶴三ツ羽 田中仙樵箱 三徳庵・大日本茶道学会蔵
26. 杉本鳳堂家の遠州仕立て
27. 青鸞 三ツ羽 井伊家伝来 彦根城博物館蔵
28. 山田宗徧作写 ツボ羽 山田宗徧流家元蔵
29. 一ツ羽 井伊家旧蔵 彦根城博物館蔵
30. 一ツ羽の柄のアップ 井伊家旧蔵 彦根城博物館蔵
31. 三ツ羽 伊達家旧蔵 仙台市博物館蔵
32. 三ツ羽の柄のアップ 伊達家旧蔵 仙台市博物館蔵
33. 孔雀金鶏飾り羽座箒 伊達家旧蔵 仙台市博物館蔵
34. 孔雀金鶏飾り羽座箒 井伊家旧蔵 彦根城博物館蔵
35. 孔雀金鶏飾り座箒 鎮信流家元蔵

平成十九年度茶道文化学術助成研究として提出された研究報告書のうち、三件をここに纏めて編集いたしました。  
なお、今回の研究報告書に添付された資料・図表等は、すべて掲載致しております。

財団法人 三徳庵 事務局

〒100-0077 東京都新宿区左門町二十  
Tel 03(5379)0753(代)

発行：平成21年6月8日